

雪のスープ

もしもあなたが、南の大陸、小麦が冬を越せないほどに冷え込む地方の村に、雪の降り積もったある日に行く機会があったなら、必ず雪のスープのことを尋ねてみるべきです。

幸運にもその日が雪のスープの日であったなら、きっとあなたに尋ねられたうちの人はそれを食べていくよう、しきりと進めてくれることでしょう。

なぜならば、雪のスープを食べるとのこと、それはあまねく総ての偉い象徴であるからなのです。

年に一度、歳の暮れの雪の降り積もった日の夕食に、来年の無病息災を願って戴くもの、それが雪のスープなのです。

……………雪のスープ、とても不思議な名前です。

雪のスープとは、雪で形づくった様々なスープの具、ポテトやキャロット、オニオンなどの野菜類やビーフ、ラムなどの肉類をいっぱいにお鍋に入れ、それをかまどにかけて溶き、煮込んだもの……………ポターージュ、コンソメ、ミネストローネ、よくわかりませんが。

ですから、雪のスープ。……………要は、お湯です。なんの味もついてない、ただの白湯なのです。

勿論、夕食はちゃんと別にあります、スープもパンもちゃんと本物なのがありますから、その点は御安心を。

でも、この作り様を聞けば、誰しもなんだと言うものです。なぜそんなことをと……………無駄だと笑う人もいましょうし、でもやはりと……………笑わない人もいることでしょう。

でも、雪のスープは遙けき過去よりとぎれることなく、つづられ続けているのです。

ある小さな村、家が数えて9軒しかないという、とつても小さな村がありました。

その年、その地方では珍しい長雨が洪水を呼び、そしてその後の水漬きの長きにわたるにまかせ、方々から疫病が発生し、地方全体へと広がりました。

ですが、その小さな村では幸運にも洪水に巻き込まれることもなく、水が家々を浸すこともなく、そして恐ろしい疫病の猛威すら、かわしたのです。

最初のうち、村の人々はこの幸運を喜びました。

でもよくよく考えてみれば、この状態は毎年でなら普通のことなのだとか村の人々は気づきました。別に豊作になった訳でもなく、それどころかあの長雨のせいで作物の多くは腐ったり、実りが悪かったりで、今年はいつにない不作になったのですから。

なにが幸せだというのでしょうか。

そして冬を迎える頃、飢饉が始まりました。

けれども、種小麦すら喰い潰している周りから見れば、まだこの村は救われています。飢饉用の蓄えと今年の方とでなんとかこの冬を過ごせそうなのですから。

でも、やはり村人に不満はありました、来年もまた不作なら、この村ももう終りだと。

その遣る方なき不満の募るがまま、毎年の、雪のスープの季節がやってきました。

歳の暮、雪が降り出しました。

いつもなら、人々はそのちらほらと降り出した雪を見て思います。

ああ、今年も雪のスープをつくる時期になってきた、早くこの白く清らかな雪によってあまねく大地を覆いつくしておくれ……………と。

ですが、今年は誰ひとりとして、そんなことを思いませんでした。

ああ、やはり今年ももう雪が降り出す時期になってしまった、このまま飢饉は歳を越して、雪の積もらない北の町との交易路が雪で埋まる頃、さらに厳しくなってしまう……………。

人々は、冬の厳しさばかり、考えるようになりました。

そんな中、雪のスープの日がやってきました。

そこで、村の人々はこんな疑問に突き当たりました。

そう言えば、あまねく総ての偉い象徴である雪のスープを去年もちゃんとつくって食べたというのだから、今年はこのなにも村中に不幸が訪れるということはない筈だ、雪のスープ、これはいったいなんなんだ……………と。

でも、それは誰も口にはしませんでした。

さらに、人々は無口なまま、こうにもまで思ったのです。

こんなお遊びみたいな雪のスープに、いったいなんの価値があるんだ……………と。

けれども勿論、それもその人の心の中の言葉、誰も口にはしません。

夕方になってきました。

9軒の家ではそれぞれ、そんな不信感を抱だいたまま、旧くからの習いである雪のスープの準備にかかり始めました。

でもそれは、他の家への体裁のそればかりです。

1軒目のうちでは、雪のスープの具を、もっと身体によいものにして、雪の具を総て菓草ばかりにして、つくりました。

2軒目のうちでは、雪のスープの具をもっと神聖なものにして、霊験あらたかな村の教会の中に積もった雪をわけてもらい、つくりました。

3軒目のうちでは、雪のスープでつくった雪の具が悪かったに違いないと思ひ、今まで話にしか聞いたことのないような金腫鹿の肉、青色パタペの尾かしらつき、百年に一度成るといふ砂漠大岩サボテンの実など、考えつく限りの豪華な材料を雪でつくりました。

4軒目のうちでは、雪のスープの具をつくらぬ雪が村人の息で汚れていたら違ひないと思ひ、南の山を越えた、もう誰も人の住まない土地から未だ見られてもいないような綺麗な雪を集めてきて、それで雪のスープをつくりました。

5軒目のうちでは、雪のスープの具は、最終的にただのお湯を食べるばかりなので、それではつくった具の真の価値がなくなると、雪でつくった具をスープにせず、そのまま、食べることにしました。

6軒目のうちでは、雪のスープの具ではただのお湯、まさしく味気もないので、そこに本物の調味料や香辛料を入れ、食べても美味しくなるようにと、味つけをしました。

7軒目のうちでは、雪のスープも本当の夕食のスープもわけるのが面倒なので、普通につくったスープのお鍋の中に、雪の具も入れました。

8軒目のうちでは、雪のスープなぞ詮は溶けてしまう具を一所懸命つくってもなんの価値もないが、周りの体裁もあるので仕方もなく、ただ雪をお鍋に入れただけにしました。

9軒目のうちでは、雪のスープに対するそんな村の空気を感じ、それならもう雪のスープをつくることも必要ないだろうと、雪のスープに関することはなにひとつ、しませんでした。

ですが、その雪のスープの日は、いつもの歳となんにも変わることもなく、白い雪は村を静かに静かに包み込んだまま、更けてゆきました。

そして、翌日が明けました。

なにも……………変わったことはありません。

普通の冬の、一日の朝が訪れただけです。

そしていつしか歳も改まり、いつもと変わらない新年初めての日を、迎えました。

村の人々はみな、天に願いました、今年は去年のような歳にはならないように……………と。

その願いがつうじたのか、偉いにも、北の町との交易路は雪に埋もれませんでした。

おかげで周りの飢饉に苦しむ村は、なんとかぎりぎり生きてゆけるだけのものが、……………借金なりなんりの代償を積んでではありますが、行きわたりました。

勿論、この小さな村にも交易路がつうじた恩恵により、この冬もなんとか普通の冬並にしのいでいくことができたのです。

雪が少ない冬は早くの春の訪れを誘い、さらに幸運にも雨季には適度に雨が降り、夏にも雪解け水が枯れた川の代わりに少くない雨が天より降りそそぎました。

……………そんなこんな幸運もあり、不幸な飢饉年の翌年は、春撒き小麦を初めとして各作物とも不作を免れ、この地方一帯はかろうじてですが再建への礎を得ました。

この小さな村でも村人の願いどおり不作にはならず、いつもの、普通の歳を過ごすことができました。

……………やがて、その歳も冬が訪れ、雪のスープの日が訪れました。

でも、今年も去年と違っていました。

去年は色々違った9軒の家々でしたが、今年はいずれも同じ、雪のスープ。

旧くから続き伝わった製法で、雪の具がいっぱいの、雪のスープを……………